

天保水滸伝の世界と八州廻り

(講演をベースにして)

2020 年 10 月 20 日

我部山 民樹

講演 1. 江戸のアウトローと八州廻り

～村の治安と江戸幕府～

2017 年 3 月 4 日

講師 児玉 賢治氏

千葉県文書館県史講座

講演 2. 天保水滸伝～房総最大の捕物

2019 年 1 月 7 日

講師 井上 正記氏

千葉いきいき大学

1. まえがき

田舎で住んでいた子供の頃、天保水滸伝やその他の任侠物の映画をよく見たが、テレビで昔懐かしい映画の放映を時々やっているが、この種の映画はめっきり見かけなくなった。皆無と言っていいくらいだ。見る人がなくなったのだ。

あの頃は見せ場にヒーローが現れると皆で思わず拍手していたことを思い出す。彼らは本当にヒーローなのか？悪役のアウトローや役人も必ずいた。ストーリーをよく思い出して、その実像を知りたいと思ったので、講演は好都合だった。講演をベースに纏めてみるが、そのポイントは

- ・天保水滸伝で知られる笹川繁蔵・飯岡助五郎や明城村の国定忠治等のアウトロー達はヒーローとして扱われている。講談、浮世絵、歌舞伎、演劇、映画、小説、ドラマなどでヒーローとして扱われてきたためである。天保水滸伝の世界の時代背景を知る。

- ・関東の農村部では八州廻り（はっしゅうまわり）とアウトローの戦いが繰り広げられた。民衆とアウトローの実態/村の治安と八州廻りの捕り物/幕府が向き合った政治課題→江戸後期（1800 年以降）の「八州廻りの時代」を知る。そして八州廻りの負の部分も知る。

2. 主な出来事

1774 年(安永 3 年)	ねだりがましい流れ者の取締令」を發布
1805 年(文化 2 年)	八州廻り（関東取締出役）の活動開始
1811 年(文化 8 年)	浪人が横行する。鳩山村（現香取市）にエセ侍が禄を失い、諸国を徘徊、鳩山村の名主の家には一夜の宿を乞い、請け合わない名主と争いになった。結果、名主と村人 4～5 名が切り殺されるという事件が発生。広く知れ渡る。
1812 年(文化 9 年)	自衛策を講じる村々の議定を作成
1812 年(文化 9 年)	幕府の「浪人取締令」が發布される
1814 年(文化 11 年)	下総（佐倉藩全域）に勢力の有る浪人の親分、神職の木田大進がねだりがましい罪で裁かれた。
1825 年(文政 8 年)	（異国船打払令）
1827 年（文政 10 年）～1829 年	文政改革、寄場組合（よせばくみあい）の設置
1837 年(天保 8 年)	（大塩平八郎の乱）
1839（天保 10 年）	（蛮社の獄、高野長英や渡辺崋山） 岩井不動の例祭日の帰りに飯岡助五郎が闇討ちに会い大怪我をする。（笹川繁蔵の仕業だと疑われる）
1842 年（天保 13 年）	繁蔵が花会（親分衆だけの賭博）を開く。助五郎は欠席しておいて、子分を代理に立てる
1844 年（天保 15 年）8 月 4 日	八州廻りから繁蔵逮捕の命令が出て、八州廻りの「道案内」助五郎が御用召し捕りと称して繁蔵を召し捕る計画を立てていたが事前に察知した繁蔵が助五郎宅を襲撃する。
1844 年（天保 15 年）8 月 6 日	大利根河原の決闘 助五郎が繁蔵一家を召し捕りに向かうが、取り逃がした上、敗走する。繁蔵は八州廻りに終われる身となり旅に逃れる
1847 年(弘化 4 年) 7 月	3 年ぶりに戻った繁蔵が暗殺される。虚無僧に変装した助五郎一家の 3 人の仕業。助五郎がこの計画を知っていたというのと、知らなかったというのと両方の説がある。
1849 年(嘉永 2 年)	繁蔵亡き後、勢力を伸ばしていた後継の富五郎が八州廻りに追われ、抵抗するが最後に自殺する
1853 年	（黒船来航）

3. 社会問題化する流れ者たちと対策

① 「ねだりがましい流れ者の取締令」の発令（1774 年）

問題は

「浪人、船こぼれ、座頭、ごぜ、勧化僧・神職、御師（おし、祈祷師）等を流れ者という。経済的な理由、身体的な理由、宗教的な理由などによって、士農工商の人達のような一般の職業に就いて生活するのでは無く、人々の善意や信仰心を頼って生きるしかなかった人々

- ・流れ者はゆすりやたかりをし、周囲は怖がって見て見ぬふりをする
- ・親分子分の関係で勢力を拡大する
- ・流れ者に対する勧化銭・合力銭（宿泊場所・金銭の提供）の社会慣行⇔村の負担になっていた。」

② 下総の鳩山村事件（1811 年 12 月 2 日）

浪人者に名主と村人 4～5 名切り殺された。

（小林一茶が旅の途中で聞いた風聞を書き留めたもの）

エセ侍が禄を失い、社会からあぶれて、小博奕にさえ負けて、頼る縁も無く、諸国を徘徊して人を脅して食いつないでいるような浪人が五人ばかり、1811 年 12 月 2 日の夕暮れ時、下総の鳩山村にきて、一夜の宿を乞うたところ、ここの名主はすこぶる利口な男で、まったく請け合わず、蛇や蠅を払うように鼻先であしらったので、両者は段々と声を荒げ、目をいからせて口論となった。その間に名主は鐘をつき貝を吹いて村人を集め、浪人らを取り巻いたところ、浪人らは覚悟を決めて抜刀し、しばらく切り合いとなったが、ついに名主の首を打ち落とし、村人を五、六人切り伏せると、村人は恐れをなして散り散りに逃げていき、浪人たちも闇夜にまぎれ逃走した。（引用）

③ 議定の作成（1812 年）

鳩山村事件の対策として、近隣の村で議定を作成

- ・変事が起こったら、かかった経費を近隣の 15 ヶ村で共同負担する。
- ・竹槍などを用いて自衛策を講じる。

幕府に取り締まりを訴えるなど。

④ 「浪人取締令」を発令（1814 年）

今後は、浪人が来たら各大名・旗本の陣屋や役所から捕手の人数を派遣し、もし他支配の土地に浪人が逃げ込んだとしても、相互に入り込んで召し捕るように

それまでは大名・旗本は自分の領地でしか犯罪者を逮捕できなかった。
規制を緩和して、取締を強化した。

4. 八州廻り

①八州廻りとは

関東取締出役（かんとうとりしまりでやく）のことを言う。関八州（関東地方）の農村部を廻って、犯罪者を召し取る幕府の役人。勘定奉行の配下として新設され、1805 年より活動が開始された。

② 設置した背景

- ・ 流れ者の問題
- ・ 幕府の捕り物の弊害

縦割り行政で、それぞれが自領民に対する支配権を持つ。他領民に対する支配権は持たないので逃げ込んできても取り締まれない。

関東は小藩が多く、且つ入り込んでいる。他藩に容易に逃げ込めるので、役人が他藩に入らせてもらうことの合意を得る間に、別の藩に逃げ込んでしまう。

その対策として関東全域を取り締まる役職としては八州廻りを設けた。

- ・ 年貢取り立ての苦しみから抜け出すため、農地を捨てて「無宿者」となる者が増えたので、農地の働き手を確保するために取り締まる。これが本当の目的だった。

③ 八州取締出役の弊害

- ・ 「無宿者」となる者を取り締まるのが本来の仕事であるが、その無宿者を「道案内」と称して手先に使っていた。十手を持って「二足のわらじ」をはく者もいた。そしてグルになって村民から金銭を取り上げた。

関東取締出役桑山圭助、郡代奉行の銚子陣屋があり、下総最大の親分「銚子の五郎蔵」を「道案内」とし、グルになって悪徳のやり放題であった。助五郎は五郎蔵の「代貸」（No.2）であり、二足のわらじをはくことになった。

- ・ 1827 年、権限を拡大して治安維持に民生面も加わり、農民を組織化してこれを取り締まりに利用した。負担が増えて農民を苦しめた。

④ 関八州の支配の仕組み

- ・ 幕府勘定奉行の配下に新設された捕り物専門の役職
- ・ 犯罪者に対する幕府の縦割り行政の弊害と関八州の支配関係の錯綜を解消する
- ・ 浪人事件等を契機に幕府は対策として法律を変える
- ・ 鳩山村のような事件や木田大進のような親分が急成長する社会情勢では幕府の規制を緩和して、浪人が来たら各大名・旗本の陣屋や役所から捕っての人数を派遣し、もし他支配の土地に浪人が逃げ込んでも、相互に入り組んで召し取るようにした。

⑤ 八州廻りの改善

八州廻りと在地との悪しき関係を絶つために、八州廻りの総入れ替えと組合村役人の大量処罰を実施。

5. 房総の問題点

①相給（あいきゅう）による問題

房総は小藩が多くて入り組んでいた。村落は相給と言われる細切れ支配で、複数の領主に支配されていた。

相給とは

江戸時代には知行地は村を単位としていたが、一村が複数の支配者によって分割知行されることを相給（相地・分給・分郷）といい、2〜3 給になることが比較的多かった。時には 10 給以上ある事さえあった。（引用）

このことにより

- ・村全体の運営が煩雑になり、命令系統が複雑になった。
- ・道路、水源、入会地(共同利用地)等村全体で利用する管理をどうするか？
- ・国役(幕府から課せられた労務)、人足役（鷹狩等の勢子（せこ））、費用の負担（犯人の運送費、八州廻りの滞在費）等の負担割合をどうするか。
- ・近隣ともめ事が起きた場合、藩員が逃げ込んだ場合の連携
幕府又は領主が組織した「五人組」は「相給」によって機能しなくなった。
(五人組は、江戸時代に領主の命令により組織された隣保制度。(治安や徴税の連帯責任を負わせた。))

②寄場組合（よせばくみあい）の設置（1827 年）

3〜5 村を小組合とし、これを 10 前後集めて取締組合を結成させた。その中核となる村を「寄場」とし、名主などの村役人を寄場役人とした。これは八州廻りが寄場役人を務める豪農層と提携して、治安維持強化をはかったものである。取締出の活動に全面的に協力させるとともに、犯人逮捕とその護送に要する費用を組合負担とした。「道案内」の給金も組合負担となった。この負担増が農民を更に苦しめることになった。

6. 天保水滸伝の世界

((1) 背景

- ① 相給
- ② 細切れの支配
- ③ 関東取締役の弊害
- ④ 社会現象の変化

- ・水運、海運の発達により河岸や港湾での運送、荷揚げの労働が高収入になり、それに従事する者を差配する「侠客」が持ち場に集まってき

- ・村共通の神社仏閣の催事での賭博開帳は黙認され「侠客」の差配となつて、寺銭の一部は八州廻りの実収となつていった。
- ・村全体の問題を解決する役目も果たすようになった。(義賊的役割)
- ・「侠客」は村人から金銭を取り上げることから、水運・開運の荷揚げ労働者を差配する、黙認された賭博の上りで生活し、村全体の問題を解決する役割も果たすようにもなつて来た。

東庄町鹿野戸地区の「村定め」例

- ・年貢米の取り立てに苦しむ百姓の「自衛策」だが、あまりにも過酷なので、その逃避先が博徒の仲間入りであった。
- ・不作であっても年貢米取り立ては峻烈を極め、逃散が頻発した。博徒が増えた。

① 東総の博徒、大親分・飯岡助五郎と台頭してきた親分・笹川繁蔵の抗争物語

-



大利根河原の決闘 芳虎画

② 大利根河原の決闘」の概要

- ・ 笹川繁蔵と飯岡助五郎の確執から、1844 年（天保 15 年）8 月 6 日「大利根河原の決闘」となった。

笹川勢 20 名、死者 1 名、飯岡勢 50 名、死者 2 名、深傷 3～5 名

笹川方が地の利を得て有利に戦い、飯岡方は激しい抵抗に会い多数の死傷者（死者 8 名）を出したうえ、舟で敗走した。

繁蔵側は「平手造酒」一名が死亡しただけだった。

- ・ 笹川繁蔵及び一家は八州廻りに追われる身となり、「旅」へ逃れるが、3 年後には笹川に戻ることが出来た。しかし、繁蔵は虚無僧に変装した飯岡方の 3 名に暗殺されて 38 年の生涯を終える。

③ 決闘の原因

- ・ 台頭してくる繁蔵と助五郎の勢力争い。例祭日に相撲興行を取り仕切る助五郎と賭場を取り仕切る繁蔵が場所割をめぐって小競り合いをするようになる。
- ・ 助五郎が岩井不動の例祭日の帰り、何者かに闇討ちに会い大怪我を負う。繁蔵の仕業だと疑われる。
- ・ 1842 年、笹川の繁蔵は須賀山明神の例祭日に笹川の「十一屋」で農民の困窮を救う（諸説ある）ために大規模な花会（親分衆だけが客の賭博）」を開き、大前田英五郎をはじめ天下に名の知られた親分衆が出席し大盛会だったが、助五郎は甘く見ており、わざと欠席し、子分を代理に差し向けた。（講談等に出てくる親分衆の全員が本当に出席したかどうかは確認されていない。むしろ疑問がある。）
- ・ 八州廻りの手配書で助五郎が繁蔵を召し捕りに行くと称して殴り込みをかける計画を立てたが、事前に察知した繁蔵が 8 月 4 日に助五郎宅に殴り込みをかけた。

そして「大利根河原の決闘」となった。

千葉県旭市、光台寺
飯岡助五郎の墓



千葉県飯岡市・定慶寺
笹川繁蔵の首塚



尚、芝居や映画に描かれている「天保水滸伝」は助五郎が晩年、講釈師・神田伯童子を呼んで語ったのが始まりとされ、助五郎自身を過大に宣伝したフィクションが多いとされている。

7. 八州廻りの活動拡大

- ・一般百姓の風俗是正のための‘教諭’を始める

江戸時代、全国各地に設けられた庶民教化の施設。近隣の青年、成人を集めて日常生活の心得、人倫、道徳などについて説き聞かせ、風俗の改善、生活の向上を図ったもので、他に読み書きの指導にあたる事も多かった。(引用)

目上の人を敬い、悪事を禁じ、身分を慎み、他人と争い事を起こさないように村人を教諭する

8. おわりに

- ・アウトローも八州廻りも二面性があり、弊害もある。
- ・繁蔵と助五郎は地元では義賊として扱われ、死後神として祀られ慕われている面もある。
- ・アウトローの実像

関東の特殊な支配構造と経済発展が生み出したアンダーグラウンドな世界であり、ヒーローでも悪役でもない、民衆が作り出す社会の一部としてのアウトローである。悪は下級の役人。

- ・八州廻りはアウトローの「道案内」とグルになり、村人から金銭を取り上げて、村人を苦しめた一面もあるが、改革を経て、活動は犯罪者の捕り物から出発して、一般百姓への‘教諭’も行い、農民のよりよい日常生活への介入も強めている。

追。房総に侠客が何故多いのか疑問があったが、合点がいった。この地域特有の相給制度とか、幕府の悪政の弊害もあり自然発生的にアウトローが増えてしまったのだ。

またこの種の物語が一時はもてはやされたのに、映画やドラマで取り上げられなくなったのは時代劇の中でも農村が舞台の捕物は江戸の町奉行や火附盗賊改より地味な所為で、視聴者の興味を失ってしまったということだろう。

以上